

布施の心

本多 克也

(講學も)

④

文・徳永 耕一

【東京へ】

褒められる」とは、誰でも嬉しい。そのことで、勉強やスポーツや仕事がぐんと伸びることも多い。

私も、今思えば、中野先生の「本多君は化学ができるな」という一言が、人生の方向を決めるのに決定的な影響を与えたように思う。

いよいよ卒業が間近に迫ってきた一九五五年、高校三年生の二学期末私は父に、「東京に行つて勉強したい」と、かねてから考えていたことを思い切って切り出したが、「何處にそげん錢があるか!働き口は地元で探せ」と父に一喝され、進学にはまつたく聞く耳を持つてもらえなかつた。

私は、酒屋の次男坊で、昔でいえば「部屋住み」だ。中高時代、人一倍家業を手伝つてきたが、長男に何かがなければ、家に残つても家業は継げない。かと言つて、地元で職を探しても、当時はほとんどの状態だった。

思い余つて私は、家出を覚悟で、東京に行く決心をした。一番お世話になった宮崎輝先生にそのことを報告に上がると、先生は私の事情と気持ちを察して、「頑張りなさい」と励ましてくれた。そして、しばらく待つていると、一通の手紙を私に差し出した。

「もし何かあつたら弟を尋ねてこらん。そして、これを見せなさい」

宮崎輝先生は他でもない、旭化成社長(当時常務取締役)宮崎輝さんのお兄さんだ。

私は折々に、「地元出身の偉い人」として宮崎輝さんの名前を耳にはしていたが、まだどれほどの偉大さなのか肌身では分かつていなかつた。

もちろん、手紙の中身も知るよしもなかつたが、先生の厳肅な雰囲気からして何か重要なものだという直感がして、

手紙を私に差し出した。

「もし何かあつたら弟を尋ねてこらん。そして、これを見せなさい」

宮崎輝先生は他でもない、旭化成社長(当時常務取締役)宮崎輝さんのお兄さんだ。

私は折々に、「地元出身の偉い人」として宮崎輝さんの名前を耳にはしていたが、まだどれほどの偉大さなのか肌身では分かつていなかつた。

もちろん、手紙の中身も知るよしもなかつたが、先生の厳肅な雰囲気からして何か重要なものだという直感がして、



高校生時代の著者

2023年3月本多産業株式会社は
設立50周年を迎えます。



本多産業株式会社

【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814

TEL:045-869-1133

【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677

TEL:0957-38-3520

ありがとうございました。

季節はまだ二月半ば過ぎで、肌寒く、好きな桜も咲いていなかつた。

母の悲しそうな顔を背中に感じながら、見送る人も無く、長崎駅発東京行き急行列車「雲仙号」で東京へ向かつた。当時はまだ蒸気機関車で、長崎東京間は24時間要した。

下闇を過ぎたころから辺りはだんだんと暗闇になり、やがて窓の外は何も見えなくなり、踏切のチンチンという寂しげな音だけが時折聞こえた。

東京へ出立)

片道切符での東京行きは、無謀だったが、私にできる精一杯のことだつた。

夜行列車の車窓から見る景色は、目まぐるしく移り変わり、私の心に期待と不安が交錯した。夜遠くに見える町々の灯りは、言い知れぬ寂寥感を誘つた。

そして、時折鳴る汽笛は、別れる人の声を代弁するかのように、時に鋭く、時に長く、未知の土地の空に響いた。

「もう長崎には帰れないなあ」

24時間かけて着いた東京駅は、車窓から見ても人でごつた返していた。列車からホームへ踏み出す第一歩は、長旅のせいか、それとも緊張のせいか、足が地に着いていなかつた。

そして、ひとたび街に足を踏み入れると、東京は私の想像を遥かに超える大都会だつた。林立する建物、車の喧騒、行き交う人、人、人……。

夢を追いかけて東京に来る若者は多い。しかし、その夢を掴み取れる者はごく僅かだ。多くは、一ヶ月が経ち、一年が過ぎ、三年もすれば、夢がしぼみ、諦めが芽生え、やがて現実の渦の中に飲み込まれてゆく。

しかし私は弱音を吐いてはいられない。上京の目的である横浜国立大学の受験が待つていたのだ。